

2-5. 有識者への意見聴取

取組み方針：専門的な知見を踏まえた提言・助言等をいただき、地権者等関係者の着実な意向醸成活動に繋げていく。

(1) 有識者への意見聴取

1) 開催概要

普天間飛行場跡地利用に係る地権者等関係者の意向醸成活動の実施に関する提言・助言等をいただくことを目的に、昨年度と同様計2回実施した。

有識者に関しては、昨年度に引き続き上江洲純子氏（沖縄国際大学教授）、神谷大介氏（琉球大学准教授）に加え、新たに小島肇氏（琉球大学准教授）にもご参加いただき、計3名からの意見聴取を行った。

なお、第1回に関しては有識者の日程が調整できなかったことから、メールによる質問と回答に代え、第2回は対面による意見聴取を行った。

2) 第1回実施概要と意見取りまとめ

○実施概要

- ① 日時 : 令和6年12月6日(金) ※メールによる質問送付
- ② 回答者 : 上江洲 純子 沖縄国際大学 教授
(敬称略) 神谷 大介 琉球大学 准教授
小島 肇 琉球大学 准教授

メールにていただいた回答については、一覧表にして次頁に整理を行った。

○意見取りまとめ

相談事項	上江洲教授	神谷准教授	小島肇准教授
1. 地権者、市民が跡地利 用計画に対して当事者意識 を持つ方法	1-①：「若手の会」を通して、 地権者の人材育成を進めて当事 者意識を持ってもらうためには どのような組織としての活動 や、組織のルールを定めておく ことが望ましいか	<ul style="list-style-type: none"> ・いずれ法人化を見据える必要があると考えるが、拙速と いう意見が多いのであれば、たとえば「研究会」あるいは 「学会」のような組織建てとし、「会則」を作るところか ら始めてはどうか。 ・会則の中では、組織体として最低限必要なルールを定め て活動を行うことが肝要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「地権者や市民が常時活動できる場」は必要ではある が、行政は支援をするだけである。関わりすぎている結 果、当事者が無責任になっているとも考えられる。 ・周りから見られる組織・活動にすること。イベントが 一過性に感じる。跡地利用が固まるまで3年に1回は必 ず実施するなどが必要。 ・マスコミなども活用し、見える活動にすることで責任 感も生まれるのではないか。
	1-②：「市内各種団体との意見 交換会」を通して、市民の人材 育成を進めて当事者意識を持っ てもらうためにはどのような活 動や、ルールを定めておくこと が望ましいか	<ul style="list-style-type: none"> ・市内各種団体からいただいた意見の中で、単年度で実施 できる企画を実施する「実行委員会」を設け、まずは既存 のまちにおける困りごとの市民への周知や解決に向けた具 体的な企画行うことから始めてみるのはどうか。 ・「新しいまち（西普天間）で生じる困りごと」を取り上 げると、西普天間住宅地区に琉大病院や医学部キャンパス が移転することから、学生（琉大・冲国大）も巻き込んだ 活動ができる可能性があると思う。 ・両大学とも宜野湾市との連携協定を結んでいることか ら、「学生×市民」で一つの企画を実現する体験をさせ、 継続性ある活動に繋げていくことができるのではないか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その施設では、市民が基地の規模感や返還後の街のイ メージ等を実感できる「返還の見える化」の工夫として 巨大航空写真や、これまで検討されてきた資料をパネル 化したり模型等を常設展示する。 ・あわせて、地権者や市民、学生等の活動や発表の場と して活用できる会議室等があるとよい。 ・「若手の会」等の組織をこの施設の指定管理者とする ことで、施設や活動の管理に主体的に関わってもらい当 事者意識を高めてもらえるのではないか。 ・場所は普天間飛行場の近隣で国県市の所有する土地が あればそこを活用、あるいは琉球大学の敷地内に施設を 置くことができれば、琉大生も活動しやすい。
	1-③：当事者意識を持つための きっかけづくりとしてどのよう な動きが考えられるか	<ul style="list-style-type: none"> ・まちに関心をもつきっかけづくりが重要。そのためには 全体への仕掛けよりも先に、小さい単位（地区別あるいは 学校区別）で地権者・市民が参加しやすい企画をしかける ところから始めることが大事である。 ・若手の会や地権者意見交換会で地区指定をしたうえで、 地権者市民が参加しやすい企画やテーマは何なのか検討し てもらい、共通テーマ・企画で、指定した地区の小・中・ 高（あるいは大学）でも出前講座、ワークショップを行っ て、最後は報告会や企画展示など共に取り組むことができ るとよいのではないか。 	

相談事項	上江洲教授	神谷准教授	小島肇准教授
2. 若い世代との関わりを継続していく方法、まちづくり活動の実践に繋がる合意形成の進め方	<p>2-①：若い世代の人達との関わりをいかにして継続していくか</p> <p>2-②：大学生が継続してまちづくり活動に関わってもらえるよう人材育成を進めていくためには、どういう取組み（内容、プロセス、時期）が有効と考えられるか</p>	<p>・年1回でもイベントを定例化することで、イベント参加者に今度は運営に回ってもらいきっかけを作ることができるのではないか。</p> <p>・宜野湾市や宜野湾市内の各種団体・企業とタッグを組んだPBL型授業（2年生以上）を展開し、年1回報告会を実施する。</p> <p>・可能ならば、授業や報告会等に参加した学生によるAlumni組織（あるいはサークル）を立ち上げ、報告内容を実際に企画として実践できれば継続的な活動ができるのではないか。</p>	<p>・大学や大学生への期待は非常に理解できるが、跡地利用に関連する分野の専門家、研究者、活動に興味を持つ教員が恒常的に活動できる訳ではないため、県外の大学の受入れ強化を図ることも一つの手段ではないか。</p> <p>・県外大学のゼミ等が沖縄で調査活動中に、県内大学との交流や意見交換などで関われると考える。</p> <p>・こうした活動に加わった学生が先の常設施設で活動を広げていき、施設や活動の管理側に加わっていくような流れが構築できるとよいのではないか。</p> <p>・学生と地域の方と一緒に考えて頂けるような関係性で臨んで頂けると、地域に還元できると考える。</p>
3. 若手の会の見直しに向けた今後の進め方	<p>「若手の会はいわゆるボランティア組織の位置づけ」という認識を若手の会メンバーがもっている中、会自体を見直すに当たり有効な取組みとプロセスとしてどのようなことが考えられるか</p>	<p>・何のボランティア組織なのか、会の目的とはなにか明らかにする方がよい。ボランティアも主体的に行う活動のため、やはりそのための会則は必要。</p> <p>・現在のメンバーが今後若手の会をどうしていきたいか、仮に市やコンサルタントのサポートがなくても活動を継続していきたいと思っているのか、メンバーだけで話をする機会を持つことも必要と考える。</p> <p>・返還見通しが不透明なことが若手の会の新規メンバー獲得苦戦の要因の一つになっていると思うため、新規メンバー獲得のためには、ある程度強制力を持たせた「会則」を定めることが効果的と考える。</p> <p>・今後は地主会とタッグを組んで、「会則」の中の、構成員の条項等で、若手の会に定期的（2年に1回等）に人を送り込み、未来の跡地利用に備えて未来の地主に勉強させる仕組みを作ることができれば、若手の会も組織として重層的な活動ができるのではないか。</p> <p>・若手の会には、1-①を踏まえて「会則」の必要性（新規メンバー獲得の条項化も含めて）を今一度認識してもらい「会」としてどうしていきたいのか、自分たちでしっかり話す機会が必要と考える。</p>	<p>・行政が関わりすぎているように感じる。</p> <p>・次年度の、会則を検討するための委員会、業務のあり方についても検討した方が良いと考える。委託業務として行いたいということなのか。</p> <p>・会則については「若手の会」が何をしたいか、その実現のために具体的にどのような事業を行いたいかによって、体制や意思決定、責任のあり方など変わってくる。</p> <p>・若手の会が担うことを整理するところから始めていけばよいと考える。</p>

3) 第2回実施概要及び議事要旨

○実施概要

① 日 時 : 令和7年3月12日(水) 14時00分～15時30分

② 会 場 : 宜野湾市役所別館3階 都市計画課会議室

③出席者 : 上江洲 純子 沖縄国際大学 教授
(敬称略) 小島 肇 琉球大学 准教授

《事務局》

永山 拓朗 宜野湾市基地政策部まち未来課 係長

仲本 彩乃 宜野湾市基地政策部まち未来課 主任主事

武 米治郎 内閣府派遣 駐留軍用地跡地利用計画

プロジェクト・マネージャー

尾上、石井、崎山(昭和株式会社)

④次 第 : 1. 特にご意見をお伺いしたい事項
2. その他

⑤配布資料 : 特にお伺いしたい事項

- ・資料1 今年度の取組状況
- ・資料2 若手の会再構築プラン案
- ・資料3 会則たたき案(目次、1～5条)
- ・資料4 第1回有識者意見聴取まとめ
- ・資料5 第4回勉強会説明資料
- ・参考 R6年度の取組み

○意見概要

上 江 洲
(沖縄国際大学教授)

若手の会の再構築について

当初、最も動きが活発な時期は若手の会とNBミーティングは、地権者と市民の代弁を担っていたことは間違いないと考える。いずれ普天間飛行場跡地利用計画の返還が実現に向けて動き出した際には、まちづくり協議会として活動する必要があるが、返還は先の話であることから現在地主ではない若い人達が普天間飛行場跡地利用計画に関わる必要があった。そこで、どのように人を集めるかと考え、最初は半強制的に勉強会形式で定例会を始め、その部分をかなり行政として支援していた。そこから抜け出せなくなったのではないかと考えている。

市主体の意向醸成活動のため、市によって委員会を設置し、各種団体と市民、地権者が一同に会して意見交換を行う場もかつては存在していたが、現在は設置されていない。その委員会で、まず組織の在り方について議論してもよかったのではないかとと思う。

現在、ここまで長期間返還されないとは当時誰も思っていなかったため、地主にとっても「また同じ説明か」と思う部分はある。それならば原点に戻り、若手の会が自ら独立する必要があると考える。そのため対外的に示すことができる会則が必要と考えていた。本日の説明を受け、その考えが若手の会の考え方と乖離していることが分かった。

対外的に示すことができる会則がないと、対外的に会の活動等を説明できない。会としての意見を示すためにも会則は必要である。若手の会が地主の意見を集約することになるため、会として独立が難しければ地主会の組織として活動し、会計も正式な手続きを経て行う必要がある。会則の議決事項として記載する必要がある事項としては理事の決定程度であると考えているが、最初は自分達で考えることが重要である。

本日の考え方で進めて、再構築できた若手の会が見られるならば非常に楽しみである。

地主会と若手の会の関係性を正しくするためにも、「(仮称) 原案検討会議」を設置することで地主会も巻き込めるのではないかと。ぜひ進めていただきたい。

今何をすべきかという点に関しては、会則に何をどう記載するのかということであると考えているが、人材育成に関する事項については、人材育成を進めていきたい側としてみれば色々なことができると思う。また、定期的に事業の中身を披露する場（イベントでもよい）があるとよい。

また、年間の事業計画はしっかりと立案し、事業報告や会計監査も行っていただきたい。そういった取組みを進めて、団体として育っていくことを実感することで会の活動を対外的に説明できることとなり、これは今後の活動にとって非常に重要であると考えている。

小島 (琉球大学准教授)	若手の会に対して行政が期待することはよく理解できたが、若手の会が活動したいこととイコールになっているのかが気になる。そこまで取組みたくないと思っている団体に、団体の不足要素や会則を提示しても果たして効果があるのかと最初に疑問を持った。
上江洲 (沖縄国際大学教授)	そうではなく、そのような形に議論を進めていかないと今までと変わらないと考えている。
小島 (琉球大学准教授)	<p>会則に「意見集約に関すること」が記載されていたが、それこそ責任を負わせてしまうことになる。若手の会が自分達でできることなのか、そもそも望んでいることなのか疑問である。若手の会以外の人達が見たとき、若手の会メンバーがどう見られるのか、公費を使って自分達の考えを取りまとめていると見られると若手の会としても不本意であり、行政としても若手の会が取りまとめた内容は使いつらくなる。そのため、会則には若手の会が活動したいことを丁寧に落とし込む必要がある。</p> <p>後は、その機能を地主会で担うことができないのかと思う。何らかの関係性が築けるのに、なぜ若手の会が独立して取組む必要があるのか。「(仮称)原案検討会議」を設置した際の、メンバーの関係性も複雑になると想像できる。どのように「地権者の代表を担っている感」を出すのが非常に難しいと感じた。</p>
武P M	地主会も、市町村により進め方が異なる。今回は、この題材を契機として地主会にも刺激を与えたいと考えている。現地主会長も今回の改選で降りると公言している。地主会も振り返る時期である。そのとき、若手の会を地主会内部から振り返ってみてどうだったのかということも考えていただきたいと思っている。そのため、両組織から3～5人ずつ同数を選出することで、若手の会と地主会が繋がっていければと考えている。
小島 (琉球大学准教授)	改めて、今回原点から考えるためのきっかけをどうするかが重要である。
宜野湾市	会則についても一気に全てを作るのではなく、少しずつ作っていきなるとよいと考えている。逆に、「行政にこういう仕組みを作っただけだと若手の会としても対応できる」など提案いただければ、行政として検討することができると考えている。例えば常設施設等も、そうである。
小島 (琉球大学准教授)	前回メールにて申し上げたが常設の場の設置は重要であり、運営するためにもまずはしっかりと組織として構築されている必要がある。
上江洲 (沖縄国際大学教授)	若手の会は「自分達はボランティア組織である」という認識であるが、市や県からは公の組織として普天間飛行場跡地利用に対して発言する団体と

		して位置づけられている部分が、実が伴っていないと考えている。そこを我々として期待する部分があり、若手の会はそれが実現できるところまで到達していると私は思っている。そのためにも、組織体として発言できるように組織を整える必要があり、そうすることが若手の会にとっても安心であると思っている。それがどうしても抵抗感があるという現状であるため、それならば自分達が取組むことを文字で表すとこのようになる、という所から始めてもよいと思う。
小島 (琉球大学准教授)	島	押し付けはよくないが、期待されていることは理解いただく必要がある。後は、会員の範囲をどの程度までとするのかは非常に重要である。どの程度地主会未加入者が存在するのか。
宜野湾市		約2割存在する。
武P M		不動産業者が持ち分で共有地として所有しており、地主会からは単有と共有がそれぞれ発生しているため、その把握だけで大変であると伺っている。そのため会員の対象範囲については、地主会事務局の意見を聞きながら議論したい。市民側の組織としてNBミーティングが存在していることから、若手の会の会員対象は、地権者またはその子息までと考えている。地権者、言い換えれば自分事として考えていただける人を対象にしたい。
上江洲 (沖縄国際大学教授)	洲	若手の会がリスタートする際にはお声かけいただきたい。
小島 (琉球大学准教授)	島	会則の目的で、土地区画整理事業に向けた情報収集及び検討は明記する必要があるのか。まだ事業の実施まで先が長いのに、土地区画整理事業ありきで議論する必要があるのか。
上江洲 (沖縄国際大学教授)	洲	地主としては、やはり減歩に興味があると思う。まちづくりの段階から供用開始後のまちにも、継続して関わるという趣旨を記載しているものと理解した。
小島 (琉球大学准教授)	島	今のご発言は、最終的に自治会の構成員になる方を見据えた重要なコンセプトであると思う。
宜野湾市		そういった話ならば、公金を活用する意義もある。
上江洲 (沖縄国際大学教授)	洲	そういった将来のまちへの関わり方も含め、自分達がどうしていきたいか話し合う必要がある。
小島 (琉球大学准教授)	島	自治会の人達とどう関わっていきたいか考えることは、他の組織との差別化になる。

武	P	M	そのことが、将来の自治会役員としてのスキル育成に繋がっていくものと考えている。
上	江	洲	若手の会の名称が変更する可能性があるかもしれない。
	(沖縄国際大学教授)		
宜	野	湾	名称変更という意見もあり、思い切って変えることもあり得ると思う。
上	江	洲	そのため次年度は「(仮称) 原案検討会議」がメインの取組みになるということであり、次年度中に原案ができるとは限らないということか。自分達からこういうことをやりたいと意見を引き出していくということか。理解した。
	(沖縄国際大学教授)		
			全地権者(約5,000名)を対象とした意向醸成について
宜	野	湾	全地権者と対象とした意向醸成については、若手の会再構築がきっかけになればとよいと考えており、地主会が気軽に参加できるようになるとよい。
小		島	前回のメールの回答について、何か質問があればお答えしたい。
	(琉球大学准教授)		
武	P	M	メールのご回答については、自治会連合会のような組織を設置し、指定管理も含め組織として今後育ていけばよいというイメージであったと理解したが、その考え方で間違いないか。
小		島	それに加え、対外的PRや体験参加等にも繋がると思う。そういう思いで記入させていただいた。
	(琉球大学准教授)		
上	江	洲	そのためにも会則は重要である。
	(沖縄国際大学教授)		
小		島	自分達の取組みを認めてもらうには、やはり会則の作成からであると思う。
	(琉球大学准教授)		
上	江	洲	大学生に対しても、この施設を訪ればこの資料があると言えるような場があって、その施設管理を若手の会が担うことになればよいと思う。また、県外から訪れた大学生に対してセミナーの場を提供する等をできるようにするためにも、会則は必要である。
	(沖縄国際大学教授)		
小		島	今、VRやPV等をHPで公開していることが多いため、そういったコンテンツの整備も進めると色々学べ、様々な意見が出てくると思う。
	(琉球大学准教授)		

小島 (琉球大学准教授)		若手の会に押し付けるわけではなく、楽しそうと思ってもらえるようにする取組みが重要である。
武	P M	親から子、子から孫に受け継いでいってもらえるような組織になればいいと思う。
上江洲 (沖縄国際大学教授)		子息も一緒に気軽に参加できるような組織にすることは重要であると思う。
上江洲 (沖縄国際大学教授)		昔、若手の会と地主会に対する勉強会の講師を引き受けたことがあり、そこでは「プロジェクトXのようなドキュメンタリー番組に、いつの日か若手の会が取り上げられるようになってほしい」と話したことがある。会発足のきっかけから現在までの過程・プロセスが重要であるという話をさせていただいた。

4) 取組み成果と今後の課題

【取組み成果】

●次年度の取組みにあたっての留意事項の明確化

以下の内容に関する取組みの方向性や考え方についてメールや対面による意見を伺うことができ、次年度の意向醸成活動を進めていくにあたり、留意すべき事項が明確となった。

- ・若手の会の再構築に向けた留意点
- ・当事者意識をもつためのきっかけ
- ・若い世代の人たちとの継続した関わり方

【今後の課題】

●有識者の新たな人選、追加について

- ・普天間飛行場跡地利用計画は令和5年度の行程計画の更新を踏まえて、より具体的な計画策定に向けて検討が進む予定である。そのため、合意形成に関しても現有識者のまま継続するのではなく、計画内容に即して新たな人選を行う等、柔軟に意見聴取を進めていく必要がある。